

語学を学ぶというハード

文 木村安兵衛

Text by Yasube Kimura

英 語という言葉が小学生の頃から勉強させられてきました。英語

と数学の成績は悪くなかったので、落第の危機を何度となく回避して生きてくることができました。現在はフランスのパン屋を、フランス人の師匠がパートナーとなり20年を超える期間、経営することができております。フランス人との仕事、特に契約や経営に関するコミュニケーションは英語にしております。フランス語でのやり取りだと語学能力的に私が圧倒されてしまいます。逆に、フランス人にとって日本語は宇宙語のように感じられるようです。仕事で使う言葉の2割ぐらいは英語とフランス語になってしまいます。

しかし、英語は苦手なのであります。厳密には苦手意識が拭えないのかもしれませんが。

アメリカで小麦と発酵を勉強していた頃の実験のミーティングの時、初めて英語の契約書に目を通した時の恐怖感は今でも悪夢となって出てくるのではないかと思う程であります。海外出張の際などは、飛行機内の映画を英語で見ることによって語学ウォームアップを行っておかなければならないほど

緊張するのであります。

学生時代の英語のテストの際、穴埋め問題などは単語の長さを測って答えなどという手法を編み出しておりましたので、学校のテスト勉強では語学力が付くわけはありませんでした。教科書が『二都物語』だった時はなぜ英語でフランス革命を読むのだろうか？という疑問に襲われる始末でした。

しかし、アメリカでパンの勉強をする、すなわち能動的に勉強するようにになると語学という物はスルスルと頭に入ってくるのであります。特に化学結合式や酵素の働きなどのような用語は英語の方がのみ込みが早かったことを記憶しております。

近年は多くの物事のボーダーがなくなってきました。パン屋ですらも少し日本で名前が売れると、台湾やソウル、香港でパン講習会をするなんて依頼は多数舞い込んできます。そのような時のために語学は勉強しておいた方が良いでしょう。特に英語は世界の共通語ですから、日本人にとってのひらがなやカタカナのような存在なのかもしれ

れません。

よくよくニューヨークの街を観察すれば路上生活者の人々も英語をしゃべりますし、英語が分からなければきつと生活保護や炊き出しにもありつけないでしょう。要は語学を恐れる必要はないのであります。

私の大学時代の指導教授は言いました。「語学が重要なのではない。話す内容の方が重要である」。しかし、人間関係を深めるために、最低限の語学力は必要なのでしよう。私には恐怖の対象です。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社フーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。

